

商団事件と黄埔軍校

—黄埔軍校の發展 その一—

三石善吉

目次

はじめに

商団事件の原因

商団事件の遠因

軍閥支配の実態

商団事件の経過

第二段階 第三段階 第四段階

おわりに

はじめに

商団事件とは孫文の南方政權の広州都市商人への苛税に対する商人側の対抗スト（一九二四年五月）に端を発し、全面的な武力衝突に至って、商団側の完全敗北に終る（一九二四年一〇月一五日）一連の事件である。中国における

商団事件と黄埔軍校

ブルジョワジーは第一次大戦期に形成されたと見られるが、ほぼ時を同じくして、ロシア革命の影響の下、中国共産党の結成・プロレタリアートの組織化が見られ、このことが五四運動から第一次国共合作期の歴史を複雑なものにしているのである。橋樑は、(一九一九年)五四、六三運動を通じて、中国の「資本家たちはまだ厳格な意味での階級構成を持たず、士紳階級(軍閥・官僚及び郷紳)の圧迫の下に、庶民階級の上層を占めて居たに過ぎない。換言すれば彼等も亦民衆の一部分であり、支配階級及び帝國主義に對抗して真剣に革命の要求を懷いて居た」⁽¹⁾と述べている。中国における所謂ブルジョワジーの確立期を、橋は、一九二七年四・一二クーデター以後、蔣介石の軍事権力と結びついた所謂浙江財閥の形成に見ているようである。

この商団事件によって南方革命政權が広州の反動反革命的都市商人を鎮圧したと見ることで、国民党も共産党も共通している。陳独秀は一九二四年八月二〇日、『嚮導』(七九期)で、帝國主義者・軍閥・紳士・奸商、これは本来意気投合するワンセットの者供であり、陳炯明(広東省の東部に勢力をもつ反孫の軍閥)は何とかして中山先生の外交政策を香港政府に告げようとし、香港政府も何とかして香港を陳炯明の広州攻撃の策源地にさせようとしている。香港の陳廉伯(広東省商業界の実力者)は以前から北方政府に傾き、何とかして陳炯明を擁護しようとし、ストでもって革命政府に反抗している。陳廉伯の大量の武器密輸は明らかに革命政府に向けるためのものである。従って、革命政府の軍事計画は、まず商団軍の解散、第二に陳炯明の討伐、第三に北伐だ、と述べた。

他方、国民党の公式見解によれば、広州の商人たちが、楊希閔、劉震寰らにせよ、革命軍の苛斂誅求への怒りを孫文の革命政權に向け、英帝國主義者はこの商人を煽動して商人政府を樹立させようとし、他方陳炯明もこの商人と結び孫文政權を打倒しようとした⁽²⁾、と断定した。つまり英帝國主義、軍閥(陳炯明や北方の呉佩孚ら)、奸商(陳廉伯ら)、

紳士による革命政權転覆の陰謀であるとする点で国民党も共產党も見解を同じくした。しかし兩者とも一致するこの商団事件観には、重大な疑問点がある。それは広州商人が果して英国や陳炯明と共同謀議して南方政權を打倒しようとしたのか。広州商人を果して反動反革命として一括把握しても良いのかという疑問である。商人たちが、橘樸の前引の如く「彼等も亦民衆の一部分であり、支配階級及び帝国主義に対抗して真剣に革命の要求を懷いて居た」とするなら、広州商人の打倒の対象とした「支配階級」つまり孫文の南方政權とは一体何であるのか、という疑問にも通じよう。

本論文はこの商団事件の過程を明らかにすること、この商団事件に黄埔軍校がどのように係わったのかを明らかにすることを狙いとする。商団事件に関する専論がすくないこと³⁾から、本稿では出来るだけ事実関係を明らかにする、歴史記述的方法をとることになるだろう。

商団事件の原因

商団事件の発端は、通常、広州市政庁（孫科が長官）が「統一馬路業權案」を公布して「鋪底捐」（營業稅）をかけようとしたのに対する広州市七十二行の商店の「総罷市」（全商店の閉店）での抵抗、にありとされる。

一九二四年四月一日に公布された「統一馬路業權案」⁴⁾は、正式名を「広州市統一馬路兩傍鋪業權弁法」といい、土地所有者である鋪主と店舗を借りて營業している鋪客との伝統的で複雑な權利關係を廃止して、各商店の資産見積高に應じて課税し、かつ地価に應じて買い上げる（孫文の平均地權の考えにもとづく）ことを、広州市全体に及ぼさんとするものであった。広州商団は、それが營業稅二割、土地売却課稅五割という高稅率であったこと、これが実際に

は軍事費に当てられることなどを理由に強硬に反対した。すでにこの一年以内に七〇余種あるいは八〇余種といわれる新税が賦課されて「その搾取の猛烈」なるに反発していたのである。

このとき広州の人口百二〇万人、商店凡そ二〇万軒、そのうち商団に加入するもの三千軒ほどであったという。広州総商會會長・陳廉伯（一八八四—一九四五）⁽⁵⁾がこの商団の長をかねた。一九二四年五月七日、統一馬路業權案の取消要求を決定、認められない場合は総龍市に入ることとし、さらに広州市周辺の民団にも協力を呼びかけ、五月二日以降は広州全市の商団と近郊各郷団は秘密会談を続け、五月二〇日から三十一日まで九十八団の参加を得て商団大会を開いた。大会の間、五月二六日には広州市七十二行が一致して統一馬路業權案および新税を即時かつ永久に取消すこと、さもなくば五月二八日に全市のストを断行すると通告した。「翌二七日、總商會で官商合同會議が開かれ、孫文政權は罷市で脅す商人層の圧力に屈服し、ついに楊庶堪省長が永遠に統一馬路業權案を取消すことを認め、ついで藥品捐や儀仗捐などの各種雜捐の取消しも布告した。かくして統一馬路業權案は孫文政權の完全敗北となった」（横山論文）。商団側は大会に参加した各地の代表とともに全市を練り歩いて勝利を祝したという。

なおこの大会で決議されたことは、

- 一 全省商団聯防總部を広州に設けること。
- 二 聯防章程の設定。
- 三 商団聯合の最高機關を広東全省商団代表大會と名づけ評議部及び執行部を設く。評議部の機關を參事會、執行部の機關を全省商団軍聯防總部と名づく。
- 四 聯防總部に總長及び副總長を置く。

五 各商団を若干の区に分属せしめ、各区に代表会及び聯防分部を置く。

六 全省聯防総長に広州商団長陳廉伯、副長に仏山商団長陳恭受及び広州商団副長鄭介石が選出されたこと。

さらにこの大会で決定され、のち重大な争点となるものに、武器購入案件がある。それは商団軍の実力拡充のため百萬元を投じてノルウェー商行に依託し、ドイツより歩槍四千丁、短槍四千丁、彈藥五百万発の発注を決定したことである。

商団の「聯防総部の成立及び広州罷市の成功は、多年戦禍に苦しんでいた省民の軍隊憎悪殊に客軍驅逐熱を具体化せしめた」。その典型例として九江市（江門市の上流、養蚕業が盛ん）の雲南（滇）軍驅逐は次のようであった。滇軍第三軍（軍長蔣光亮）の第六師第一二旅々長保榮光の軍が九江に駐屯し、毎日二千元の納付と土糸、繭の輸出税をかけ、砲台を占拠して市民を威嚇した。ここにおいて九江の商団は一斉に武装し、南海、鶴山両県の一四商団の応援でこれを追い出した。そこへ粵軍許崇智の部下呉三鏡が私兵千余人を率いて九江の為に來援した。保は第三軍々長に救援を求め、第六師の第一旅、第五師胡思舜の一部が即時同地に派遣された。この報に接した九江商団は広州の聯防総部に來援を求めた。総部は一方で、七月一日に五百人を、ついで六百人を送り、二千人の滇軍と対峙せしめると同時に、他方孫文、廖仲愷に滇軍の撤兵を求めた。七月一日に、孫文らは第五〇次特別會議で苛税の取消を決定し、滇軍総司令楊希閔に苛税の取消と軍の撤退を求めた（七月二一日）。撤兵費二〇萬元を求める蔣光亮、胡思舜の要求を、商団は悪例を残すとして認めず、結局、滇軍はなすところなくひきさがった。

一九二四年七月のこのような反軍閥の運動の活発化は、言うまでもなく鄧中夏『中国職工運動簡史』のいう沙面罷工（一九二四年七月一日―八月一七日）からの反帝・反封建の労働運動の高揚とも一致するものである。同じく七

月、直轄第一軍朱培德（滇軍）の軍が樂昌・坪石（韶関の北、湖南省境に近い）で百貨捐、塩捐、猪牛捐をかけ、広東商会連合会の政府への圧力によって、この新税を取消させた（七月一二日のこと）。また同じく七月、譚延闓の湘（湖南）軍が従化、増城で抵借証（抵当付借用書）を発行し、各種の苛税をかけたのに対し、従化県議会の議長謝杜衡が政府に訴え、これを取消させている（七月一五日のこと）。「東方雜誌」はこういった「廣州商鄉団の大連合」こそ、都市と農村の自衛を強化し、商会を保護するもので「民力奮興的佐証」と高く評価した。同時代人である橘樸と同じく、これを「専制的権力」に対する「民衆の力」の表現とみたのである。しからば、すでにレーニンの植民地問題テーゼによる、共産党の植民地及び後進国のブルジョワ民主主義との一時的な「提携」・「同盟」という漠然たる指令のもとに、マーリンによってこれが国民党、共産党の党内合作として強行され、国民党一全大会で「三大」政策を決定して民衆路線を歩みはじめた南方政権にとって、如上の民衆の反政府運動は一体何を意味するのであろうか。この間に答えるために、我々は更に孫文南方政府の由来にまで溯らなければならない。

商団事件の遠因

辛亥革命成り、一九一二年一月一日、孫文は南京で臨時大總統に就任した。武力なき革命政府は袁世凱の武力に抗しえず、三月一〇日、袁は北京で臨時大總統に就く。孫は袁の独裁を阻むべく、三月一日南京で大總統の権限を大きく制限する臨時約法・「暫定憲法」を公布してこれに対抗した。一九一二年八月第一回国会選挙が行なわれ、国民党は衆参両院で圧勝して第一党となった。しかし袁と袁亡きあと北京を押えた北洋軍閥政府は、この約法とこの国会を蹂躪、軍事独裁を強行した。ここに孫文が護法（一九一二年三月の臨時約法を護ること）と旧国会（一九一二年八

月)の復活をスローガンとして、広州に南方政府(一九一七年九月一〇日の護法軍政府)を樹立する。ここから、いわゆる南北対峙の形勢は蔣介石による中国統一(一九二八年十二月二九日、東北易幟)まで続くことになる。

ところで武器なき孫文の南方政府、とりわけ護法をスローガンとした時代の南方政府、つまり護法軍政府(一九一七年九月一〇日―一九一八年五月四日)、改組護法軍政府(一九一八年五月二〇日―一九二〇年六月三日)、中華民国正式政府(一九二一年五月三日―一九二二年六月一六日)を支えたのが、南方諸省を支配した軍閥である。護法政府は広東広西兩省を支配する陸榮廷と莫榮新、雲南貴州を勢力下におく唐繼堯が主導権を持ち、やがてこの四省に湖南と四川が加わって六省となり、これが北方政府に対峙したのである。護法をスローガンとする南方政權は、すくなくとも名目的には、憲法と旧国会の擁護という民主主義的要求を旗幟として結集した、北方に対するシャドー・キャビネットとしての革新性を持つものであって、その限りにおいて辛亥革命の孫文の臨時大總統時代の精神を繼承する新しい中華民國の理念を掲げるものであったが、實質的には南方に割拠する軍閥の私的支配という性格を免れえなかった。

しかも、一九二三年二月二一日、陳炯明を逐って成立した広東大元帥府(この政權が新生ソ連に接近し、黄埔軍校を作り、北伐を敢行してともかく中国を統一することになる)は、次の点において護法軍政府と違っていた。一つは、一九二二年六月一日、新しく總統に就任した直隸派の黎元洪は、その四日後(二五日)、旧国会を八月一日北京に回復することを約束して合法正統政府たることを宣言し、孫文の護法のスローガンを無力化させてしまったのである(いわゆる第二次恢復国会である)。孫文の政府が大元帥府としか名のらなかったのは、それによる。⁽⁸⁾これはつまり南方政府の、實質はともあれ名目的な正統性の喪失であり、新たな統合の原理―それはやがて陳独秀によって国

民革命論として提示される―が、見出されなければならなかったのである。第二に、南方政府が以前よりも遙かに地方的な政権となつてしまつたことである。南方政府は、国民革命の理念が普及・浸透する北伐期まで、広東省いな広東省の三分の一を支配する地方政権として逼塞を余儀なくされた。第三に、大元帥府は孫文の長い革命家としてのカリスマ性に依存し、それ故に、真偽の「三民主義者」が故郷を離れてここ広州で孫政権を支え、他省出身のいわゆる客軍が大きな権勢を持つことになつた。他省出身者の中に多くの孫文支持者が存在したことは、ある意味では孫文の「三民主義」の普遍性を示すものではあつたが、その政府が質の悪い軍隊に支えられ、かつその支配領域が極端に縮小したため、政府を維持するには、その支配下の住民（主として広州市の商民）に恐るべき重税を課することになつた。しからば、孫文の大元帥府を「支えた」といわれる客軍はいかように成立したのか。迂遠ながら今しばらく、大元帥府の成立過程をふりかえつておこう。

広州客軍の生成

陳炯明に広東を追われた孫文は上海に至り（一九二二年八月一四日）、護法に代る新たな理念の模索に動き出した。ソ連のA・ヨッフエの代理ゲッケル、そしてヨッフエ自身、そしてマーリンらに合つて新生ソ連に近づきはじめた。李大釗が個人の資格で国民党に加入して国共合作のレールが敷かれた。孫文はこうして護法に代る国民革命への道を歩みはじめると同時に、陳炯明打倒の策も実行に移しはじめた。

一九二二年一〇月一八日、許崇智を東路討賊総司令とした。第一軍黃大偉、第二軍許崇智、第三軍李福林である。

黃大偉は一九二三年七月上旬陳炯明に降るが、許崇智を中心として孫文直系の粵（広東）軍が育つていく。一九二二

年一二月六日には楊希閔を代理滇（雲南）軍総司令とした。その部下に朱培德、范石生、楊坤如、蔣光亮、沈鴻英ら
がいた。同じ日、桂（広西）軍第一師々長劉震寰を桂軍総司令とした。孫文の陳炯明打倒策は、許崇智の粵軍を福州
から広東へ、滇桂軍を広西から広東へと進ませ、東西から挟撃することであった。孫文としては直系の許崇智の粵軍
に広州奪還の希望を託したが、ところが陳炯明打倒の主役は、広西から肇慶、三水、広州へと攻め込んだ滇桂軍であ
り、一九二三年一月一六日、続々と広州へ流入した。他方、許崇智の粵軍は潮州惠州をぬけずに福州に留まった。孫
文は上海より広州に戻り、一九二三年二月二一日大元帥の位についた。そして滇桂の各軍が広州市内をさわがすのを
恐れて、各軍の将軍を集め、二月二四日、駐防区域を次のように画定した。⁽¹⁰⁾

楊希閔の滇軍は北江一帯に、劉震寰の桂軍は石龍、東莞、虎門に、東路討賊軍第四師呂春榮（桂軍であるが一九二
三年一〇月陳炯明につく）の軍は羅定に、桂軍の沈鴻英は肇慶に、その他の軍は現在の駐屯地を動く勿れと指令し
た。（しかし沈鴻英のみこの指令に従わず、広州白雲山一帯に駐屯して反抗したので五月九日討伐を受け南雄に逃げ
て割拠した）。かく広東奪回に成功した各客軍は、主として、粵漢鉄道、広三鉄道（広東―三水）、広九鉄道（広
東―九龍）に沿って駐屯した。粵軍の主力部隊は許崇智に率いられ、陳炯明の後方を攪乱すべく、福州で潮汕で、あ
るいは広州に戻って（一九二三年八月）石龍、博羅で、陳炯明軍と苦しい戦いを続けていた。一九二三年一月、陳炯
明軍が広州に迫ったとき、孫文は湖南の衡州に駐する譚延闓に打電し、広州の危機を救うべく指令した。一九二三年
一月一四日、譚は五軍よりなる湘（湖南）軍を率いて広州に向かい、予（河南）軍も湘軍とともに広州を守り（一
月一八日）、危機は去った。かくて、予、湘軍は広州にあって客軍となった。「これ湘軍の客軍となる、これより
はじまる」⁽¹¹⁾と『最近三十年中国軍事史』も述べている。

以上の経過を見ると、滇桂軍の力が孫文政權の成立に最も大きな役割を果し、粵軍はたかだか遊軍の役割しか果していない。一九二三年一月の広州危機では、滇桂粵軍皆破れ、湘予軍によってかろうじて陳炯明を撃退できたが、結果としては、滇桂軍のほかに更に湘予の客軍を廣州に呼び寄せたことになった。それでは孫文を支える広東の軍閥総兵力はどれ程であつたろうか。M・ウィルバーは一九二三年三月段階における兵力を算定しようとしている。正確な数字を出せないでいるが、およそ、沈鴻英の軍が北江と西江に五千、滇軍楊希閔の軍が廣州に六千、粵軍（陳策と周子貞）の江門にあるもの一万二千、滇軍朱培徳の西江肇慶にあるもの三千、李烈鈞の汕頭にあるもの三千、そのほか数は不明なるも劉震寰の軍の広西にあるもの、李福林の河南にあるもの、をあげている。⁽¹²⁾一九二四年一月までであるが、チェレパーノフは、楊希閔の滇軍が全三万、湘軍が二万、劉震寰の桂軍が九千、許崇智の粵軍が三万、朱培徳軍（滇軍の一部）が四千、最も多くみて総計九万五千ほどの兵力とみている。⁽¹³⁾

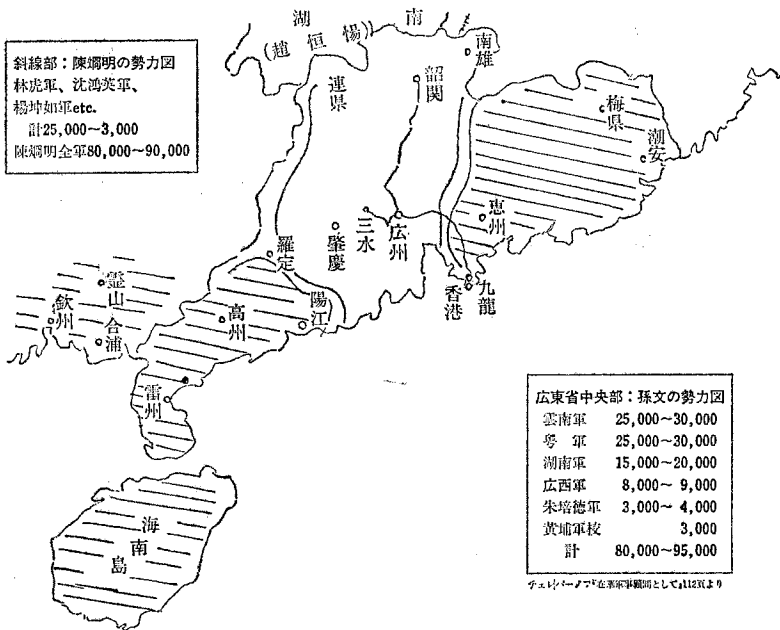
さて、国共合作、国民革命という新たな統合の原理を見出した孫文の南方政權は、むしろそれ故にかえって、内外の敵に囲まれ、広東の一隅に逼塞していた。護法時代の、名目的ではあつてもともかく存在していた南方の統合は崩壊し、湖南には北方と結ぶ趙恒惕が、広東省の東部は宿敵陳炯明が、広東省の西南部には陳炯明の古くからの部下鄧本殷が、広西は唐繼堯が勢力をのびし、大元帥府を包囲する態勢であつた。一九二四年末の段階で、ソ連の軍事顧問チェレパーノフは、孫政權の勢力図を残しているが（次頁参照）、大元帥府は廣州を中心として粵漢鐵道に沿った、広東全省のほぼ三分の一を占めるにすぎない。広東省のほぼ三分の一を占める中央部の、しかも広州市及びその近郊に、ほぼ八―九万にのぼる孫文の直系、同盟の各軍が分布した。一九二〇年代前半、広州市は人口百二〇万を擁し、城壁にかこまれた老（旧）城と新城、これを取りまいて東関（ソ連顧問団の住宅、黄埔軍校の北較場分校、廖仲愷の

邸宅などあり)、南関(珠江と新城の間の带状地帯)、西関(租界地・沙面や商団の本部のある豊かな商業区)、河南(南関の対岸の島、孫文の本営がある、この河南島の下流隣りが軍校のある黄埔島)、花地(粵漢三水支線の始発駅・石圍塘がある)から成る。一九二〇年一〇月の周恩来の文⁽¹⁴⁾によれば、広州での軍閥中、滇(雲南)軍が最も「驕横」、ついで李福林(李は緑林の出、河南島生れ)らの軍隊だといひ、広東の新旧城は滇軍の范石生が押え、西関は同じく滇軍の廖行超が、河南は李福林が支配していたという。

軍閥支配の実態⁽¹⁵⁾

鈴江言一によれば、軍閥とは、①「特に劣悪な素質の私兵を擁し、一定の勢力範囲を画定し、土地と住民に対する絶対的専制権を保持し、この専制政権のもとに自由に課税し、農民の経済外の搾

商団事件と黄埔軍校



取をほしいままに」する。②「最も低級な目的意思のもとに帝國主義と結びつき、不断に内亂を醸成している」、「彼の目的願望は、ただ彼らの収入をより大ならしめること即ち彼らの支配領域をより拡大すること以外にはない。彼らはこの目的願望のために愛国者となり革命家となる」。③軍閥は本質において地主階級の武装の表現である、という。

軍閥の軍隊を構成する兵士、これを鈴江は「特に劣悪な素質の私兵」と断定したが、これは鈴江自身認めているように「土地を失いつつある農民の一部」、「失業農民」にほかならず、これがあるいは土匪となり、あるいは軍閥下の兵士となる。この一九二〇年代になつてもなお、農村から析出された過剰労働力を吸収する近代工業が未発達のも中国では、土匪か兵士かのいずれかの途しかなかった（労働者となつたその極く一部分は、上海や広州で国民党や共產党に組織され、巨大な力を發揮していたのと比較せよ）。とまれ、兵士の給与は月六―八元であり、この中から食費や日用雜貨を自弁する。しかもこの僅かな給与すら、三、四ヶ月の支払い停滯が続く（上官が上前をはねるため）。兵士はその不足分を駐屯地方の住民から徵発する。ただ戦争の場合は、食事がつき比較的正規に給与を受け、かつ掠奪を公認される。兵士はただ利益だけを追い、「忠義」の道德はない。

軍閥は略奪のみならず様々な手段を用いて私腹を肥やす。その手口は、同じく鈴江によれば、「有利事業の独占、白色テロル、土匪の養成、交通機關の占有、無規道税捐の強徴、國庫收入の横領、不換紙幣の濫發、公債の押売り、國家資産の競売」などであるという。いまその主要なものを、鈴江によりつつ繁をいとわず紹介し、軍閥の苛政の一端を見ることにしよう。

①アヘン経営 これは軍閥の私腹を肥やす最も有力な手段である。中華民國になり、大小官僚、土豪劣紳の夜ふか

しと朝寝、日課としての賭博、一夫多妻、収賄、夜間政治、宴会政治といったアヘン政治が公然と行なわれた。ケシの栽培は山西をのぞいて全国に奨励され、雲南、貴州、広西、四川、陝西、甘肅等が代表的産地となった。広州はアヘンの消費地として有名で、広東国民党政府はアヘン独占によって毎月五百万元の収入を得て、その財源を維持していたという。

②無規道稅捐 軍閥は軍備拡大の為に人民に重税を課す。その徵稅法は統一なく、地方地方徵收者の意思により随意の名目と随意の稅率をもつてなされ、中央政府と關係を持たない。例えば、印花稅は一万元以上の買物には三%の印紙を貼用すること、屠宰稅法は自己私有の牛、豚、羊などを自己の食用の為に処分しても一頭いくらで税をとられた（牛一頭三元、豚六〇仙、羊四〇仙、一九二九年末河北省）。また家屋稅は一間に一間に（門、便所、台所、廊下も一間に数える）課稅される。しかもこういった稅は、三年、四年あるいは一〇年分の稅が予徵され、地方支配者が交代しても前任者への前納稅を認めず、新しく徵稅を開始する。軍閥はそのほか随時に随意の場所に稅關を設け、通過稅、出境稅などを要求する。一例を挙げるなら、四川省の重慶から成都までの百七〇里の間に個々獨立の稅關が五〇余ヶ所もあり、この稅收入も地方軍閥の大きな收入源であつた。鐵道、長距離トラック輸送についても信じ難いほどの付加稅がかけられる（鈴江はその付加稅の名稱を詳細にあげている）。木材のない北方では石炭が一般家庭の燃料であるが、北京郊外の周口店の山元でトン当り三元ほどが、それが北京天津になると、一六―二〇元にもなる。これは玉子、肉、野菜などすべての商品がこのような狀況とみてよいであらう。

③戰費の捻出と戰事徵發・収奪 軍閥は戰爭を遂行する為に巨額の公債を發行し、各地各県の戸數に依じて強制的に徵集する。かく戰費が集まり戰爭が開始されると、まず交通機關が押えられ、毎月の收入の八割が軍事費として横

領され、かつすべての貨物に三―四割の軍事税がかけられる。のみならず、一般の輸送、旅行、商用などでの使用がほぼ「不具者状態」あるいは不通の状態におかれ、数週間から数カ月あるいは数年に及ぶことがある。鉄道の補修はほとんど行なわれず、国有鉄道のほとんど全部が根本的修理を要する状態（枕木の全面的取換えが必要）にあり、速力を出せない。水上交通も同じで、汽船の徴発あるいは禁足令が出される。以上は大型交通機関の場合であるが、農民、市民の持つ馬、駱駝、荷車、舟が人間もろともに徴発される。北京の如き大都市でさえ、白昼、所要所に隠れていた兵士が通交中の馬、荷車とその引き手もろとも、棍棒や帶革で殴りながら拉し去る光景が見られた。食料品、馬糧、燃料などもすべて暴力的に徴集され、紙屑の如き軍票が交付される。

戦争が終り勝負がつくと、敗戦軍は退却に当り、行きがけの駄賃として、手当り次第の略奪や暴行、徴発した一切のものを持ち去る。（敗戦の高級軍人は、本拠地か租界地に姿を隠し、しこたま貯め込んだ貯金通帳をもって息ぬきをする）。そのあとに入ってきた戦勝軍も当然のこととして略奪や暴行をほしきままにし、軍費を要求し、軍票を濫発する。住民はますます昂じる生活難とますます加重する軍事費を負担しなければならない。しかも、一九一二年から二八年までの一六年間に、一千三百余の軍閥が、百四十余次にわたる軍閥戦争を行なっていたというのである。

以上の状況は、ここ孫文の革命政府下として例外ではない。呉鉄城の伝える（『呉鉄城先生回憶録』）大元帥府の財政難の一端は次のようであった。各地に駐留する軍隊は、その地で税を徴集し、賭博場を開き、なおも不足するとして大本營に請求してきた。東江一帯は陳炯明のため徴税できず、政府の財源はほとんど広州一隅にのみ依存した。特に一九二四年二五年の間、広州市の家屋税は二〇ヶ月が先取りされていた。政府は官産や廟宇を売りに出し、各省から来た軍隊もその省の広州市にある会館や公産を売って軍費に充てた。税金の徴集は呉鉄城が長官である公安局の警察

の任務で、ある年の暮、終に軍事費は底をつき、呉は広州市の商会に頼み、軍票を作りそれで家屋税の担保とした。ある滇軍の兵士（二人）が、そういった臨時の鈔票で買い物しようとして、商店側と争いになり、店主が呼び子を吹くと、巡邏中の商団員が瞬時に殺到し、二人を射殺してしまったという。ここでは滇軍のいわゆる軍票なる紙幣の強硬使用と商団の異常なほどの警戒ぶりに注目しておこう。

横山宏章はこの孫文政權の財政逼迫を分析して卓拔（註（3）参照）であり、それによれば、財政統一（これは客軍に握られている各種徵稅機關の回収によって客軍を政府の統制下におこうとするもの）と広東海關の回収に失敗した孫政權は、その支配が及ぶ唯一の地域・広州市の都市資本に依存せざるを得ず、これへの重稅によって財政危機を切り抜けるしか方法がなかったと述べ、その手段として既に軍閥の搾取の手口として鈴江が語る様々の方法が、ここ広州の革命的政權下でも採用されたことを詳細に述べている。それは税金の予納（一年分を前納させる）、無担保での軍用米の徵集、質屋への印紙稅の強要といった赤裸な強制調達から、更に新稅の増加（商業牌照費、業佃保証、屠肉稅、鮮魚稅、宴會稅、爆竹印紙稅など）、稅率の強制的引き上げ（渡船運賃、爆竹印紙稅など）がとられ、その度に商人層の反發をさそい、罷市をさそい出していた。本論のはじめに述べた統一馬路業權案もそのような都市商人への重稅政策の一つとして提出されたものであった。

都市商人への重稅のしわ寄せを克服するには、広東省の三分の二を支配する陳炯明軍の討伐と広東省の三分の一に分布している同盟の客軍の勢力削減が前提条件となろう。孫文ははじめ許崇智の粵軍を福建から潮汕にと進ませ、広州市近郊の滇桂軍を東征させることで陳炯明を狭撃させようとするが、陳軍の圧倒的優勢の故にむしろ広州市そのものが危うくなり、潮汕の粵軍を二三年八月には広州に呼び戻し、石龍一帯で陳軍の攻撃を阻止しなければならなくな

る。しかも、廖仲愷の述べるように、財政の統一は客軍の強硬な反対にあい、「整理の着手すらでき」ず、「今日に至るまで二年間、財政の命令は庁内を出ず、財政長官は五度代れども皆手をこまねいて策はない」⁽¹⁶⁾。まさに、陳軍を平定するには子飼いの粵軍のほか滇桂湘軍といった客軍の戦力が絶対必要であるが、しかしこの客軍のある限りさし当てる孫文の革命政権の強化は不可能というジレンマに直面する。要するに、客軍・軍閥に頼る限り孫政権も軍閥化せざるを得ず、佐々木到一のいう「革命軍と称する新興軍閥」⁽¹⁷⁾たらざるを得なかった。その意味で黄埔軍校の創立はこれら軍閥に頼らぬ、革命精神にもえモラルの高い孫文直系の軍の創出をめざす有力な方法ではあった。しかし今、この一九二四年八月の段階（商団事件が顕在化した時点）では、一期生四九九人の訓練の真つ最中であり、二期生の募集・入校が始まったばかりで、まだ使用にたえない。かくて孫文のとりうる手段は、この時点では、一方客軍に頼りつつ陳軍と対峙し、他方商人層に軍閥顔まけの重税をかけて財政的危機をきりぬけるという手段しか残されていない。（もう一つ有力な手段は、のち孫文が実行するのであるが、一挙に広州を脱出して新しい革命の根拠地を作ることである）。時期尚早の革命政府と、同盟の客軍、陳炯明、広州商団といった複雑な対立のうちで、重税に耐えかねた商団との対立がまず激化していくのである。

商団事件の経過

商団事件は、広州市とその周辺のみ支配する孫文の大元帥府の重税政策そのものを遠因とし（つまり孫文政権の軍閥性）、直接の原因は一九二四年四月の統一馬路業権案に端を発し、この重税に商団側が大同団結して、広州市の商団と近郊の商団・郷団九十八団体が聯防章程なる自衛策を打ち出して革命政権と対決の姿勢をとったことにある。い

まこの商団事件を次の四段階に分けてその経過を追ってみよう。

第一段階、一九二四年四月の統一馬路業權案反対運動から五月下旬の商団大会、さらに七月、九江などの商団の客軍駆逐運動の高揚に至る時期（但しこの第一段階は「商団事件の原因」としてすでに述べた）。

第二段階、五月下旬に秘密裡に発注した商団の武器が孫文政府に差押えられ、その返還を求めて政府と交渉あるいはストを続け、何とか合意を見た八月三〇日までとする。孫文は商団軍の首領陳廉伯と宿敵陳炯明とが共謀している、一般商人はその陰謀に加担するなど、商団の内部分裂をはかるが、商団側の一致してのストに押され、不本意ながら滇軍の調停に原則的に同意し、一応和解に達する。

第三段階、和解条件の実行においていざこざがあり、かつ孫文側が商団軍・陳炯明・イギリス帝國主義・北方軍閥との結合を強調して、行き詰まりを打開せんとするが、これは反軍閥というそれまでの基本戦略に、更に反帝國主義を加えるもので、局面はより全面的となるも解決はいよいよ絶望的となり、孫文は北方政局の「好転」を理由に、革命の根拠地・広州放棄を企てる。一九二四年八月末から一〇月九日までの時期とする。

第四段階、双十節のデモ隊と商団軍との遇発的流血事件を契機として、一挙に武力闘争となり、商団軍が敗退して、孫文は完全に広州市の覇權を握り、陳炯明討伐（これを第一次東征と称するが、これこそ北伐、中国統一への第一歩となる）に傾注することが可能となった。以下では、第一段階はすでに述べ終ったので、第二段階以降について述べてよう。

第二段階

七〇

一九二四年五月下旬にドイツに発注した商団の武器約九千丁と彈藥約四百萬発がノルウェー船（船主はデンマーク人）Harvard（哈仏・ハブ）号にて入港するとの報を商団軍總長の陳廉伯が受けたのが、恐らく一九二四年八月四日のことである。陳は同日直ちに粵軍總司令の弟許崇灝（粵漢鐵路総理）のつてで、軍政部の「護照」（輸入証明書）を入手すると同時に、李福林や滇軍に武器二百丁の報酬でこれをひそかに陸揚げすることを依頼した。しかし八月八日ハブ号の広州入港を知った広東税関長は、それが対支武器禁輸協定に違反するのではないかと判断し、これを拘留することにした。⁽¹⁸⁾ 孫文がハブ号の入港を知ったのは八月九日の夜である。彼は直ちに英国総領事に、軍艦を出動させて武器の荷揚げを禁止してほしいと依頼すると同時に、同夜蔣介石に永豊、江固艦もて英艦と協力して行動せよと指令した。孫文が武器差押を決意したのは一〇日のことであり、孫から荷揚げ阻止を依頼された英国総領事は「そのような目的の為に英国軍艦を派遣することは承諾し難い」といつつも、広東政府がこれを差押えることには反対しなかった。広州の領事団は対支武器禁輸協定参加国領事会議を開き、八月一日には北京関係国公使団に差押えるべきか否か質問した。一九一九年に締結されたこの協定には、ハブ号の船籍たるノルウェーは加入していず、かつ武器輸出のドイツも入っていないかった。

八月一日、日本在広州総領事天羽は、護照と manifest（積荷明細書）を秘密に見る機会をもった。マニフェストには單に“safety ammunition and arms 1129 packages”とあり、護照には「小銃四千八百五十挺付屬彈丸百十五萬發、モーゼル拳銃四千三百三十一挺付屬彈丸四百六萬發、其他大小拳銃六百六十挺付屬彈丸百十六萬四千二百發、

合計千二百二十九箱」、荷送り人は「アントワープ Alfred Breymler」、荷受人は「広東ドイツ商人 Sander Weiler」、荷物引受申請者陳廉伯、となっていたという。陳廉伯は秘密裡の荷揚げ不可能とわかった一日、商団・商団軍の長を辞任して香港に身を隠した。ハブ号が潮の関係から広東省河に入港したのは八月一二日のことであったが、蔣介石は孫文の指令に従って、永豊、江固艦でこれを拘留し、黄埔軍校正門前の船つき場に繋留し、その日のうちに武器一二二九箱を陸揚げして軍校に保管した。

このニュースは直ちに商団側に伝わり、二千余名が黄埔島の隣り河南島なる大本営に押しかけ、孫文に武器の返還を請願し、かつ、もし要求が容れられなければ広東全市商店を閉鎖すると威嚇した。これに対し孫文はこの日、商団の代表百三十二名を前に、なぜ政府が武器を差押えたか大略次のように説明した。①軍政部発行の護照（八月四日発行）では四〇日後に積荷が届くことになっているが四日後には着いている、なぜか。②李福林や滇軍に武器二百丁ほどを報酬としてひそかに荷揚げしようとしたのはなぜか。③商団軍は千人ほどしかないのに、八九千丁もの大量の武器を、誰に何の為に買ったのか。こういった疑問が調査して明らかになったら返還しよう。君達の領袖（陳廉伯のこと）は野心家で、君達と我が政府が合作するのを阻んでいる。君達は人の煽動を受けたり、欺かれたりするな。⁽¹⁹⁾孫文はこの武器密輸を商団軍の領袖陳廉伯が孫文の宿敵陳炯明と結んで政府を打倒しようとの陰謀であると見た（英帝との結びつきはまだ言わぬ）。それ故に、一般商人に対し、領袖の陰謀にまどわされるなと警告し、両者を隔離区別する考えを見せている。孫文のあげた第三の疑問点について言えば、五月末の大会に参加した九十八団体に対して武器全九千八百四十一丁であるから、各団に百丁と計算したものであろう。決して多い武器とはいえない。ともあれ陳廉伯と一般商人を区別する孫文の考えは、現実の推移の裡に、その誤謬性が完全に暴露されていくのである。

翌八月一日には、商団はかねてより聯防総部成立の祝賀会を予定していた（これは五月末の大会で決定していたが、水害などがあって延期され、この日に挙行する予定となっていた）、一万人を収容できる大会場を作り、各街々には牌楼（屋根のついた鳥居形の門）を建てるなど鋭意準備を進めていたが、省長廖仲愷は政府主導の「商団民団統率處」を設け、商団を政府の統率下に置く考えを持っていたので、この「聯防総部」成立の祝賀を禁止した。ところが商団側は武装せる商団軍の庇護の下にこれを強行したのである。⁽²⁰⁾商団側は孫文の革命政府をも、これまでの客軍駆逐運動と同じく、いささか強硬な圧力をかければ譲歩するものとみなしていたふしがある。

商団側の強硬な態度に孫文側も対応に苦慮したようである。八月一日（から二六日まで）大本營で開催された國民黨中央委員会総会で胡漢民、廖仲愷らの共產党派と張繼、謝持ら非共產派との激烈な論争があった。共產党は断乎たる商団鎮庄の立場をとったと思われるが孫文の意向が会議を制した。翌一九日、孫文の名で出された「商団諸君」への文書は、陳廉伯個人が陳炯明と結んでいるという先に見た孫文の理解をふまえ、更に進んで陳廉伯は北方の呉佩孚と結んでの、孫政権転覆の大陰謀を企てていると断定したのである。それは大略次のように述べていた。

① 陳廉伯が密輸した武器のうち、諸君が出資して購入した分は返還する。

② 陳廉伯はイタリアのファシスト党にない、八月一四日を期して蜂起して政府を倒し、自分は広東督軍とならんとす、との大陰謀が発覚した。

③ のみならず彼は北方の呉佩孚とも結んでいる証拠がある。

④ よって商団諸君のうち、悔悟する者は咎めず、陰謀に加担する者は政府これを懲罰するであらう。

武器密輸の責任を商団軍総長陳廉伯に帰し、他の商団諸君は無罪として商団の分裂を計らうとする孫文の意図は、商

団の懷柔、商団との決定的対立の回避にある。他方、広州の領事団より対支武器禁輸にふれるのではないかと問われた北京公使団は、八月一八日、「該武器が陸揚げせられたる今日、ネーヴアル・アクションの問題は消滅せり」とて、孫文政権への不干渉を決定した。八月二日、広州の領事団もそれにならった。⁽²²⁾つまり孫と商団との交渉にまかせたのであり、列強の直接的な介入・干渉なるものはないことを確認しておこう。

全ての責任を商団会長陳廉伯に帰す孫文の理論は、橋樑も述べるように、実際の状況からほど遠いものであった。橋は言う。広州商人は「我々〔孫文〕の味方」、商団は「謀反団体」という規定は「明らかに事実反する」。広州商人は広州市総商会の組織者であり、広州市商団軍の組織者でもある。よって広州商人・総商会・商団軍の「三者は不可分なる一体」にはかならない。⁽²³⁾とするなら、孫文革命政府は、今や、客軍・封建軍閥に全力をあげて抵抗する広州新興ブルジョワジーの全勢力と真正面から衝突しているのであり、商人の反軍閥の要求こそ、実は孫文の三民主義の理念、黄埔軍校の設立の理念とも完全に一致する筈のものであろう。ただ、商団の、次第に高まりつつある反共のスローガンが、孫文政府の行方に一つの暗い影を投げかけているとはいえ。というのも、共産党の陳独秀は八月二〇日、すでに見たように（「はじめに」参照）、陳炯明―香港政府―商団の三者の結合をいい、密輸された商団の武器が一体誰に向けられようとしているかは明白であると断定し、我々の戦略は第一に商団、第二に陳炯明、第三に北伐であると診断した。陳独秀は、孫文とは違って、広州商人を敵にまわすことに躊躇しなかった。むしろ反動的（と彼が確信する）広州商人・広州ブルジョワジーの粉砕を通じて、中国の統一を構想していた。そして、さし当って、孫文政権の行方は、まさしく陳独秀の「予言」のままに進行するのである。

商団側は孫文の分断工作に乗せられることなく、ヨリ団結を強化し、ヨリ強硬な対抗手段をとるかまえを見せる。⁽²⁴⁾

商団側は、事ここに至って、共產党とはまったく反対の立場ながら、同じく、客軍つまり孫文政權との対決を覚悟した。まず陳廉伯が去ってから、仏山市商団長・聯防総部副団長の陳恭受が全商団軍を率い、八月二〇日、総機関を仏山に移し、ついでここに全省代表を集めて大会（一八日―二二日）を開催した。そこで「孫文に武器引渡しを要求するも満足なる回答を得ざるため」、全省を挙げて政府に対抗すること、その手段として、①全省の商団軍を集中させ、②それぞれの地で全店閉鎖（総罷市）を行なうことを決定した。そして二二日には仏山、九江など数十埠がストに突入した。客軍の駐防軍との衝突が頻発しはじめた。

孫文側は相変らず一般商人と陳廉伯を分断する考えを捨てず、八月二三日、前商団軍総長、現商団軍総長の逮捕令を出した。⁽²⁵⁾ 陳廉伯の罪状は、吳佩孚との結託、八・一四クーデター計画、武器密輸、ストの扇動の四条、陳恭受は「匪賊を集めて反乱を謀った」である。これに対して商団側は同日直ちに、全武器の無条件返還、聯防総部の設立許可、陳廉伯の逮捕令取消の三項目要求を提示し、二五日、総罷市を敢行すると一歩も譲らない。仏山、九江のほか、広州市近郊の都市にもストは拡がり、二五日にはついに政府の膝元広州市もストに入った。大元帥府外交部長伍朝枢の調停も失敗に終り、近郊都市のストに参加するもの、この日ですでに百余市となった。政府と商団の全面的対決である。この時、孫文は拙劣にも和・戦両面作戦をとった。つまり一方で二五日滇軍の范石生、廖行超と商団の三条件の検討をはじめ、翌二六日には三条件の手なおしを行なって商団代表に示すとともに、他方では二七日期八時にストを解かなければ軍事処分にする（これは二八日午後四時に延期された）⁽²⁶⁾ といひ、二七日には工団軍を組織し、軍艦永豊を珠江に游弋させたのである。かくて「市内の人心更に動揺し、一八日まで香港及び沙面へ持運ばれたる支那人の財貨、未曾有の高に上りたりと言う」（『日本外交文書』）。二七日商団側は孫文の両面作戦にいかりながらも、范石

生らの調停にそつて、この新三項目に基本的に同意し、二八日午後四時までにストを解くことを約し、ここに商団と政府の対立は無事終るかに見えた。

ところが開市（スト解除のこと）の直前、八月二八日の午後、ピラまきをしていた商団軍の中隊長鄭競先を公安局員が射殺する事件がおき、商団側はこれを理由に開市中止を宣言したのである。ここで調停者范と廖は市内が戦場となるのを恐れ（范と廖は広州市内に駐屯し、市内が戦禍を受ければ収入が減少する）、商団には孫文の市内砲撃命令書を見せ、孫文には広州市を擾乱するなかと主張して、強制調停にのり出した。八月二九日、范、廖は次の六条件を出し、同日午後、双方不満を残しつつも、とも角合意に達した。翌三〇日、各都市は前後して開市した。范、廖の六条件とは、①陳廉伯、陳恭受は通電（公開電報）して過を悔いる。②陳廉伯の逮捕状の取消。③商団は五〇万元を支払う。④政府は武器を返す。⑤市内駐軍の撤退、⑥七日以内に聯防総部設立を認可すること、の六項で、共産党によれば、商団は五〇万元支払っただけで、その目的をすべて達成した、これは革命政府が買弁勢力に投降するものであると批判した。⁽²⁷⁾

第三段階

政府と商団が和解に向かおうとしている八月の末、新たな状況が加わった。それは列強の干渉（と孫文が確信するもの）である。国民党の公式文書によると、八月二九日、広州駐在英国総領事は、公然と商団を擁護し、もし政府が広州市を砲撃するなら、英国海軍は全力を挙げて応戦しようと呼びかけたというのである。⁽²⁸⁾ 他方、共産党も、この度の反乱を組織したのは広州にある英国の各機関のスタッフであり、この度の反乱のリーダーは陳廉伯、陳恭受の買弁で

あり、公然とこの度の反乱を支持したのは英国帝国主義の砲艦政策であると断定した。こういった帝国主義の干渉、威嚇論を裏づけるものとして、商団系の香港「循環日報」に（九月三日）次のような記事がある。曰く、商団が五〇萬元支払っただけで目的を全て遂げることが出来たのは、首席領事である日本の天羽領事が二八日夜、政府がもし商民を砲撃するようなことがあれば、外国は実力もて阻止させるであろうと述べたこと、二八日白鷺潭の列強の軍艦九隻の大砲が永豊艦に向けられていたこと、そういうことがあったからこそ孫政府の無暴な市内攻撃が避けられたのだ、⁽³⁰⁾というのである。

しかし、国民党の見解も共産党および「循環日報」の観察も、一面的であるように思われる。そもそも、広東の「左傾」に最も利害の深い英国とて、この一九二四年の八一〇月段階で公然たる中国への干渉を行なうであろうか。周知のように、一九二四年一月二二日から一月四日まで英国では労働党のマクドナルド内閣が成立し、この八月八日にはソ連を正式に承認している。勿論、ロシア革命以来英国のソ連敵視政策は不変で、英ソともに「著しい敵意と不信を保ち続けた」⁽³¹⁾ことは確かであるうが、このマクドナルド政権が積極的に中国の内政干渉にのり出したとは思われない。いうところの英国の威嚇干渉とは何か、天羽の威嚇とは何か。事態をもうすこし詳細に見るには、このとき広州の首席領事として情報の集中することの多かった天羽総領事のレポート（註（18）参照）を見ていくのが良いであろう。

天羽の幣原外相への電報（八月二九日）によれば、二八日の危機の際、米、仏の総領事は開戦を予想していたが、天羽は独自の情報ルートから范石生の調停が進行していることを知っていたので開戦にはならぬと「信じたるも、万一の場合もあれば、同日「二八日のこと」夜、英米仏及び各首席海軍士官の会合を催したり。其の結果本官より広東

当局に口頭を以て、(一)外国在留民の生命財産に対する危害、および(二)防備なき市街に対する発砲に対し警告し、(三)外国在留民の生命財産に危害を加えたる場合は、広東政府是れが責任に任すべく、当該外国官憲は必要と思惟する行動を執るべき旨を通告することに決定し、更に英仏領事及び士官の間に内密に、(一)市街戦開始の場合、沙面における警備方法、(二)沙面に砲彈落下し、其の発射場所判明するときには、直ちに是れに応戦すること、(三)支那軍艦が沙面外に碇泊し、沙面を越えて発射するときは、沙面に対する敵対行為と見做し、英仏軍艦より士官を派して発射を停止せしむべく、場合に依りては之と応戦することをも辞せざることを取極めたり。

見られる通り、天羽が広東当局(廖仲愷ら)に口頭で伝えたことは、「外国在留民の生命財産」への危害には「警告」および「当該外国官憲」「つまり軍事的介入ではない——三石」は「必要と思惟する行動を執る」こと、「防備なき市街に対する発砲」に「警告」することであり、「循環日報」の伝える、市街戦がおきたら直ちに兵力を送って阻止させるようなニュアンスは全くないことである。そもそも天羽は、この時点では市街戦などおきないと「信じ」ていたのである。それでは英国総領事の威嚇・干渉の公文書なるものはどうか。天羽に依れば、それは、上記二八日夜の英米仏日などの「領事団の警告(つまり天羽の伝えた三項目のことである)」を列挙したる後、当地英国首席海軍士官は香港上級士官より「もし支那官憲が市街に発砲するときは、英国は総ての軍艦を以て直に之に敵対すべし」との命令を受けたるに付通告すと」あったという。この「恐喝的文書に対しては孫文も非常に憤慨し」、九月一日、英国を非難する対外宣言を発するに至るのである。

ところで国民党も共産党も、この時点から現在に至るまで一貫して、英国と陳廉伯との共同謀議を確信している。天羽も「同僚中にも英国と商団との関係につき疑を挟む者なきにあらざるところ……」と述べているから、その当

時、日本人外交官の中にも陳廉伯と英国と関係ありとみる者があつたことを示している。しかし天羽自身は、明言しないが、否定的であるように思われる。とまれ、九月一日付の孫文の対外宣言は⁽³²⁾大略次のようにいう。

廣州滙豐銀行の買弁「陳廉伯のこと」の反政府行動の背後に英国帝国主義があるとは信じ難い。英国工党は政権をとつてのち被圧迫民族への同情を屢次公表しているから中国への砲艦政策を放棄したと思つた。ところが八月二十九日の英総領事の公式文書には、香港海軍総司令の訓令として「もし中国当局が市街に発砲すれば、英国海軍の全ての軍隊を即時に出動させるであらう」とあつた。これは宣戦布告に外ならぬ。政府が止むを得ず行動をおこそうとしている所は、陳廉伯の根拠地・西関の一部にすぎないが、これをまったく無防備の市街へ発砲という野蛮行為といいくるめるのは、帝国主義的熱狂の表現に外ならぬ。民国が成立してから帝国主義は外交的、精神的、経済的に一貫して「反革命」を援助してきた。そして今ここに英国工党政府が打倒しようとしているのは、中国で唯一の革命精神を保持している、反革命に抵抗する政府なのだ。かつて満清打倒の時期あり、今や帝国主義の中国への干渉を転覆する時期が始まつた。

労働党内閣が出現しても侵略的帝国主義の本質は変らぬとは言ひも言つたりであるが、実はマクドナルド内閣は新生ソ連の承認を他国に先がけて行ない、むしろその為にこそ、保守党、自由党の総反発を受け、短命政権に終るのであるが、問題の香港海軍総司令の訓令は、たとえ人道上の立場からであっても、一つは英国の国益（帝国主義の国益といつてもよいが）、一つは恐らく英国の伝統的な反共の立場からされていると思われ、弁解の余地は全くないが、しかし孫文のいうような陳廉伯との共同作戦、共同謀議をも意味するものではあるまい。

いずれにせよ孫文は今や公然と、商民・工人・農民の各階級が共同して中国を独立国家となさんとする「国民革

命」⁽³³⁾の途を辿りはじめた。中国を「次植民地の地位」に落している元凶こそ、英国に代表される帝國主義の中國侵略である。とはいえ、反帝國主義のアクションとして孫文は一体いかなる行動がとりうるであらうか。実は実質的になかなる手段もなかったのだ。孫文が英帝攻撃を開始したとき、北方では孫文のみるところ「重大」な変化がおきつつあった。孫文はこの北方政局の好転に刺激され、北伐を敢行して帝國主義と商團との正面对決を回避し、広東の革命根據地を放棄しようとするのである。しかれば北方の戦局の急変とは何であらうか。

北方の政局・戦局は奉天派（張作霖、日本の援助）、直隸派（吳佩孚、英の援助）、安徽派（段祺瑞、日本の援助）の三大軍閥による闘争として展開し、第一次奉直戦（一九二二年四月二七日、奉天派の完敗）では、孫文は張・段と結んでの反直三角同盟を結成したが、直隸派と通ずる陳炯明のクーデター（一九二二年六月一五日）で上海に亡命する。大元帥府を樹立してのち、この一九二四年九月に入つて、いわゆる第二次奉直戦がおこるが、これは江蘇督軍齊燮元（直隸派）と浙江督軍盧永祥（安徽派）の小競合から全面接触（一九二四年九月三日）に發展することではじまった。九月一日から浙江の動向に注目して、大本営會議を連日開催していた孫文は、再度反直三角同盟に従つて盧永祥を救い、更に直系軍閥を倒さんとして北伐を敢行しようとする。

第二次奉直戦の始まつた翌日の九月四日、中央政治委員会（出席者は孫文、瞿秋白、伍朝樞、バラディーンの四人）で孫文は念願の北伐を決定した。それは、

① 浙江軍と策応して江西を攻略する。

② 孫文が客軍全部を統帥して親征する。九月八日、大本営を韶関に移し、広東に留守部隊をおく。

③ 第一次北伐軍（譚延闓を前敵統率とす）は河南軍樊鍾秀（二千）、中央直轄第一軍朱培德（三千）、江西軍李明

楊（千五百）、湖南軍譚延闓（六千）。

八〇

④各部は九月二日各所在地より韶関などに一〇日以内に集中する。

⑤北伐宣言を發す。

⑥韶関大本營に政治訓練団を特設する。

⑦九月七日の國民運動大会のスローガンを反帝國主義と反地方軍閥とする。⁽³⁴⁾

①―⑤の項目は北伐に關してであり、これは翌九月五日、大本營での軍事會議で、胡漢民が大元帥の職權と広東省長を代行して広州に留まり、北伐軍總司令には湘軍の譚延闓が就いた。⑥は後に詳述するであろうが、黃埔第一期の第一隊がこれに加えられ、韶関で訓練につく。⑦は北伐と反帝を理論的に結合するもので、①―⑤で決定した客軍主体の北伐軍を、英と結ぶ直隸派の齊燮元打倒に出発させることで、まずは商團との摩擦・鬭争を終焉させ、かつ反軍閥・反帝國主義の名をとろうとの戰略であつた。

しかし北伐には重大かつ困難な問題が残つていた。それは北伐軍事費の捻出の問題つまり広州商團との問題である。

孫文は革命の根拠地・広州には三つの難点⁽³⁵⁾があるとみる。一つは陳炯明の脅威であり、一つは英帝國主義の存在であり、一つは客軍の貪横である。もし広州を棄てて韶関に移り、英帝と結ぶ齊燮元を討てば、この三つの難点は一挙に解決できよう。なぜなら、もし韶関に移れば、陳炯明の攻撃も、香港の英帝の圧迫も、更に広州における客軍の重税も、さし当つてはすべて回避できる。つまり北伐は孫文もいうように「最善」の「生路」なのである。しかしその為には北伐の軍事費がいる。しかもそれは当面広州の商人たちに頼らねばならないだろう。とはいえ、商團への武器

返還や聯防總部設立の問題が解決しない限りそれは不可能であろう。もし武器を返還すれば、香港の英帝と結ぶ陳廉伯を許したことになる、これまでの反帝のスローガンはくずれ、かつその武器は孫文の革命政權に向けられよう。このジレンマに直面して、孫文らのとった方策は、武器の返還を出来るだけ引きのばしつつ（最終的には返還しなければならぬだろう）、北伐費を出させ、陳廉伯を許して強大な香港英帝との衝突をさせ、しかも英と結ぶ直隸派の打倒を説くことで反帝の名をもとろうとする。

問題は従つて、八月末に出された六項目の実行にかかつていた。その第一項、陳廉伯の通電は何度も書き直されて、九月一五日に出了た。第二項の逮捕令の取消は九月二二日に出了た。第三項はすでに商團側は五〇萬元を用意し、武器とひきかえに渡すといつてゐる。第五項の市内の駐軍の撤退は、北伐軍の韶關結集令によつてすでに実行されている。第六項の聯防總部の設立も要求通りに認可された。かくて残るは、政府側の武器返還と、それと同時に五〇萬元を支払ふことのみとなつた。このことを見こした孫文は、商團の武器を売つて北伐の軍事費としよふとの蔣介石の提案をしりぞけ（九月八日のこと）、かつ北伐軍に商團の武器を分配するとのかつての指令も撤回した（九月一二日のこと）。

八月二九日の六項目を認めたとき、北伐の話はまだもち上つていなかった。しかしそれからほんの数日後、かく北伐の計画がもち上ると、たった五〇萬元で手を打つたことが悔やまれた。北伐費はすくなくとも四百萬元はかかる。武器全部を返し、五〇萬元受けとれば話は済むところを、政府はこの五〇萬元をつり上げる様々な手段を用ひだしたことで、商團側はますます硬化した。政府はまず①北伐費公債四百萬元を請け負えと要求した。ついで②北伐費百萬元をまず前納せよと要求した（要するに四百萬元を百万にまけたのである）。ついで③上納金二〇萬元と全市の房租税

一ヶ月の前納という条件にかえた。最後は④武器一丁につき五〇元で返還する（五千丁ほど返還するとみて二五万元である）と譲歩した。⁽³⁶⁾①②③が商団の拒否にあい、四百万元が最後には二五万元にダウンしたのは驚きであるが、最も驚き怒ったのが商団側で、政府のこのような契約違反に対し、契約なるものの初歩的な講義を行ないつつ、契約とは当事者の双方を拘束するものである、条件のしばしばの変更は事態を紛糾させ、かつ「公意」にそむくものであると非難し、商団側代表は九月二八日辞職して、交渉は完全なデッドロックにのり上げた。これが九月一日から九月二八日までの事態の進行である。この間、孫文は北伐の準備に忙殺されている。

孫文が北伐に出発するのは九月一三日のことであるが、孫文は出発に先立って九月五日「売国殃民」の曹錕、呉佩孚を討つこの度の北伐に民国の存亡がかかっていると強調、⁽³⁷⁾また同じ日、曹・呉を討つて浙・上海を救うは粵（広東）を救うことでもある、去年以来、粵の民は億にのぼる軍事費を負担して苦しんでいる、北伐は軍閥を掃除し、民治（後出）を完現する為のものであると説いた。更に九月七日「九七国恥紀念のための宣言」で、義和団事件に結着をつけた北京議定書（辛丑条約）の正式調印の日（一九〇一年）九月七日をもって国恥紀念日とすること、義和団はアヘン戦争以来の、列強の宗教的・政治的、経済的侵略に抵抗した（扶清滅洋をにかけて清に利用されたが）、帝国主義者は曹・呉を利用して中国を植民地化しようとしている、従って、今我々のスローガンは「打倒軍閥、打倒帝国主義」に外ならない、しかも、大多数の人民を糾合し、破れざる堅い団体を形成して始めて帝国主義を打倒できよう、「輕拳妄動」、僥倖に頼ってはならないと説いた。つまり広州を去って韶関に赴むこの北伐は、決して反帝闘争を回避するものではなくて、むしろ真の反帝の戦いの開始だというのである。

それとともに孫文は広州の市民たちが民治を実現できるように次のような三つのプレゼントを約束した。

①速かに各軍（客軍のことである）を移動させて北伐する。

②広東人民の自治実行の方法として、市長の民選を行なう。

③現在の一切の重税雑税をのぞき、民選の役人で新しい税則を作らせる。

この約束をした孫文は、九月一日朝、柏文蔚、吳鉄城らと千五百の兵とともに特別列車で韶関に向かった。この同日、黄埔軍校の第一期生の第一隊の学生百余名が、文素松に率いられ、戦場を学校となすために、韶関に向かつている（一〇月七日に戻る）。孫文のそのような約束にもかかわらず、各軍は北伐費捻出の為、戦時軍需署を設けて重税をかけはじめた。しかも、すでに見たように、武器の返還と上納金の額で折合わず、商団側が硬化して、政府の五大背信を指摘して代表は辞職、両者の関係は再び断絶するのである。

まさにこのとき、武器を満載したソ連船来粵のニュースが孫文のもとに届いたのである。⁽³⁸⁾一〇月三日孫文はこの武器を黄埔におろせと指令した。武器は絶好のときに着いた。一〇月七日の夕刻、黄埔軍校の正門の波止場に投錨した Vorovsky（ヴァラーフスキー）号は、八千丁の長槍、一〇丁のピストル、一丁に弾丸五百発、全四百万発の武器をウラジオストクからここ中国の革命の根拠地に運んできたのである。これがソ連の孫文国民党援助の第一弾であった。M・M・バラディーンが一九二三年一〇月六日に広州に到着して、丁度一年目にして始めて、ソ連の実質的な援助が届いたのである。なぜかくも遅れたのであろうか。その理由はこうである。一九二四年五月三十一日、中ソ協定が正式に結ばれたが、一九二四年九月までロシア大使館はソ連に返還されず、その間、ロシア大使館の人員はオランダ大使館の中に間借りしていて、独自の活動ができなかったからである。一九二四年末になって、ロシア大使館はようやく中国における諸活動の中心として、活発な動きを見せるのであり、ヴァラーフスキー号は、その最初のものである。

ったのである。

この武器が届いて狂気したのは、バラディーンヤソ連顧問たちだけではなかった。孫文も北伐のためにこの武器を欲していた。蔣介石も軍校のためにこれを欲していた。客軍の將軍たちもまた自軍の強化のためにこの武器を欲していた。軍校の学生たちは大喜びで、翌一〇月八日、朝から夕方までかかって荷揚げをした。かくて第一期四九九人、第二期生四四九人の僅か千人足らずの学生の学ぶ黄埔島に、一万五千丁以上の武器、彈丸凡そ一千万発近くが保管されることになった。翌一〇月九日、滇軍の范石生が三〇隻の船でこの武器を奪いにくるとの噂が立ち、校長蔣介石は慎重を期して、黄埔島全域に戒嚴令をしき、島全体の警戒体制作り（野戰陣地と要塞の建設）に全学生を投入して突貫工事を行った。それは、まず、黄埔島の中心にある升旗山頂に瞭望哨を、島の東西南北に警戒哨を設け、電話を設置し、隊長と学生数名が各哨所につめた。ついで、海上の警戒網は魚珠砲台を中心に、さらに要塞は長洲要塞司令部と魚珠を中心に設置された。散兵壕も掘り、砲には実弾を込め、機関銃も据え、ここに歩兵、砲兵連繫の警戒網が完成した。双十節の式典は九時から軍校でやり、広州市第一公園の大会には出席できなかった。かく根拠地の防備が完成して、蔣介石はここ広州を死守する決意がついた。

他方、商団側はどのような動向であつたらうか。商団は一〇月四、五日と仏山に商団代表會議を開き、決裂後の方針を定めた。その大方針は、一〇月一〇日の國慶節に全省の商店のストを決行し、商団軍の武裝パトロールを行つて威を示してのちに、以下の六項目を政府に要求することとした。⁽³⁹⁾つまり条件闘争ではなくて、まず先にストを行つて、しかるのちに、無条件的に、六項目要求をすべて政府に飲ませようとの商団側の強い意思のあらわれである。その六項目とは、

① 全ての苛酷な税の取消し。

② 売却してしまった（投交）市内の寺廟などの資産を全て返還すること。

③ 武器を全て返還すること。

④ 扣留、売却した商船を全て返還すること。

⑤ 全省の自治機関を回復すること。

⑥ 鄭競先を射殺した警官や区長を銃殺すること。

この九月五日の決議は、直ちに、韶関にいる孫文に伝えられた。孫文は商団をなだめるべく、一〇月七日、滇桂湘三軍の総司令に「戦時軍需籌備處」の廃止を命じた。更に商団の決意が固いと見た孫文は、一〇月九日夕方五時半、省長の胡漢民に急電を打ち、民団督弁李福林の出した調停案を実行するよう指示した。李福林は九日午前中より商団主脳と会見し、ストの中止はならなかったが次のような三条件で、ついに合意に達したのである。つまり、①商人が二〇萬元を税の名目で支払う。②武器は五千丁以上返還する。③武器返還の日、商団は通電してこれまでの誤解を解くというものである。孫文は同時に蔣介石には軍校に保管してある商団の武器を李福林に渡すよう指令した。蔣介石はこの武器を一〇月九日夜九時に李福林に渡している。

第四段階⁽⁴⁰⁾

翌一〇日は国慶節である。この日商団は決議に従って、質屋、雜貨店、銀業、呉服商らがストに突入した。その他の店も半ば店を閉じ、食料品店だけが平常通り営業した。この日の朝、李福林は黄埔から三千九百九十九丁の武器と

彈丸一二万発をもって西濠口に運んで、河岸より荷揚げした。商団は武装団軍千余名を派遣して、李福林軍の保護下に武器を受けとった。李福林は武器を無事商団に渡す責任上、大平路から西瓜園の商団本部に至る道を通行止めとし、途中で武器の強奪を企てる者があらば発砲してさしつかえない旨を商団に通知していた。客軍の強奪が考えられたからである。

一〇日は双十節である。この日、広州反帝國主義大連盟の集会が第一公園にて午後一時から催されていた。二九団体が参加し、「打倒帝國主義」「推翻軍閥」を叫び、三時から一五団体がデモに移った。軍隊関係では警衛軍講武堂、工団軍、農民自衛軍の三隊のみで、武器を持たずブラカードや旗を持つだけであつた（黄埔生は島で警戒体制作りの最中である）。あとは建築工会、漢文排字工社、図強女子産科学校、農民運動講習所女生隊、船主司機士会、勞工婦女日夜学校、酒業工会、人力車夫俱樂部、協作社、女子工読学校、油業工会、聯義社で、労働者、農民、学生、兵士、女性、商人から成っていた。デモ隊は第一公園から長堤を経て大平南路に至った。時に商団軍は、長堤、西濠口、大平路から西門まで武装パトロールを行なっていた。デモ隊はこのいわば戒嚴令下の街々を行進していった。デモ隊が西濠口にさしかかったとき、楼上の商団軍の発砲を合図に、街上の商団軍が、この武器なきデモ隊に向つて発砲したのである。デモ隊が東側の商店街に逃げ込もうとすると、背後から追撃され、死者一五名、溺死者一三名、逮捕者五〇名に及んだ。攻撃、逮捕には李福林軍も協力した。

韶関にいる孫文は、一〇月七日から一四日まで、広州の状況が次第に緊張を加えていくなかで、広州をすてて韶関に移動し、北伐を敢行しようとの意図をますます強く持つようになった。奉天軍と孫の軍で、北方政府を挾撃するという雄大な構想に、孫文が深く魅せられていることを示す。一〇月七日から一四日まで、毎日、孫は北伐をいい、黄埔

や広州を棄ててよい、韶関に來たれと叫んでいる。蔣介石も孫と同じく、鄒魯が証言している（『中国国民党史稿』商務印書館版、一〇九五頁）ように、広州を棄てて韶関ならぬ肇慶にすべての機關、すべての部隊を移そうと考えていた。しかし許崇智、廖仲愷に説得されたこと、黄埔軍校の警戒体制のめどがついたことなどによって考えを変えるのが一〇月九日のことである。蔣はこの日孫文に「埔校の危、旦夕にあり、先生早く師を回し來援せよ、根拠の要地を棄て、吾党に永久に立足の地なからしむを願わず」と返事し、一〇月一日にも、大元帥が師を回して難を平らげよと要求している。

四十節の日、孫文は韶関にあって、ヴァラーフスキー号の船長はじめ多くのロシア人官兵とともに、国慶節の典礼を挙行していた。吳鉄城は翌一〇月一日、ソ連官兵を護衛して韶関から広州に戻る途中、軍田（粵漢鉄道の駅名、広州から二六哩）に至ってはじめて、四十節事件を知り、急ぎ西瓜園の司令部に行き、情報を集めてのち省長廖仲愷に合いにいくと、廖はバラディーンとともに、すでに、事件処理について孫文の意向打診に、韶関に行ったことを知った（『吳鉄城先生回憶録』）。

一〇月一日の午後と一二日の午前中に、韶関での孫文、廖仲愷、バラディーンによる最高首脳会談が持たれた（三人とも英語に堪能である）。決定された方策は孫文の意向を強く反映するもので、北伐と商団問題の双方に対応するものであった。北伐は孫文が親征する、孫文によれば北伐はどうしても必要であるから敢行したい、私はだから広州に戻って商団反乱を平定する気はないと言いきったのである。⁽⁴¹⁾そのため、商団問題を処理する最高機関、かねてから日程にのぼっていた革命委員会がこの日作られた。会長は孫文で、許崇智、廖仲愷、汪兆銘、蔣介石、陳友仁、譚平山の六人が委員に任命され、これに政府の全権を与えることとし、商団への攻撃の作戰大略がたてられた。それ

は次のようである。⁽⁴²⁾

中立派と左派を中核として大衆を加え、一四日夜一〇時か一五日の早朝、商団と決戦する、その為に、

①一五日に中央公園でデモ、革命委員会と民衆との一体化を説き、商団と民衆とを分離させ、武力戦に入る。

②革命委員会は現在の国民党の闘争の目的、意味を民衆に宣伝するべく、パンフレット、ビラを飛行機や武装車でまく。

③ビラを今日中に「国民日報」に出させる。

④軍事行動は、蔣介石が主導し、一五日のデモのあと、一五日夜におこされる。

一〇月一二日の午後、以上のことを決定してのち、バラディーン、廖仲愷はともに列車で広州に帰った。同時に、吳鉄城の警衛軍も商団鎮圧の為に韶関をはなれて広州に向かった。湘軍の一部（三千）、粵軍張民達の軍は、韶関を出て、一四日午後七時に広州市に入った。この間、商団側は武器も弾丸も全部返還されぬことを理由にストを強化し、一日には食料品店もストに突入、生活必需品の供給が杜絶し、広州は食料封鎖状況となり、市民の恐慌は、一二、一三、一四日と極点に達していく。商団側は武装パトロールを強化し、打倒孫政府のハリ紙をはり、一四日には広州市の商団軍が西関に結集した。その兵力凡そ四千、後備二千人ほど、各街の木柵は全て締切られ、西関の街は戒厳令下におかれた。

これに対し政府側は一四日までには次のような措置がなされた。

①吳鉄城を警衛軍の長として革命委員会の直轄下におく。

②軍事委員会委員長蔣介石を総司令として商団平定を行ない、軍校には何応欽を代理校長とす。

③ 革命委員会の司令部を廖仲愷の家とする。

④ 共産党の本部を同志某の家とする。

⑤ 蒋介石は、警衛軍、工団軍、農民自衛軍、飛行隊、甲車隊、兵工廠隊、陸軍講武学校、滇軍幹部学校、粵軍第一師（李濟深）、粵軍第二師（張民達）、滇軍（范石生、廖行超）、粵軍（許崇智）の全軍の指揮を行なう。

⑥ 軍の配置。許崇智麾下の張民達、許済は西門を、吳鉄城の警衛軍は普濟橋、廻欄橋を、李福林は大平門を攻撃する。工団軍は西関にまぎれ込み、内側から放火して呼応する。滇軍は長堤、沙基、黄沙を押え、湘軍は西村を押え、かくて西関を完全に包囲する。全兵力二万。

一〇月一五日午前二時頃、長寿街で小競合があったが、一五日朝五時、西関に通ずる三方面（西門、大平門、廻欄橋）から総攻撃を開始した。しかし商団は屋根の上から下を狙い、政府軍は大いに苦戦し、商団軍の防禦線を突破して進むことができなかった。朝九時、前夜から侵入していた工団軍が内部から放火し、腹背に敵を受けた商団軍は支えられず、普濟橋を守りきれぬまま、吳鉄城軍と黄埔学生軍の西関侵入を許した。政府軍は優秀な武器（大砲や機関銃）の威力と永豊艦からの援護砲撃、燃え上る火災に助けられ、旧式武器と瓦、レンガ、石、煮えたぎるオカユ、鉄三角を武器とする商団軍を包囲し、午後一時頃、商団軍は寧波会館に拠って頑強に抵抗していたが、北郷（北方の村）に向って潰走敗退した。政府軍は商団公所を占領、午後四時には完全に降服した。一五日夜九時、広東領事団は即時停戦せざれば陸戦隊を上陸させて武力調停を行なうと通告、一六日朝停戦命令が出された。夜五時商団の副団長陳恭受が黄埔軍校に謝罪に來た。西関以外の商店はこの一六日のうちにストを解除した。火災は一六日午後八時に至って漸く鎮火した。

この市街戦で打銅街の一三行、登龍街の銀街、上九下九甫の綢緞店、第四、五、六、七、八甫、長壽街など繁華を極めた西関一帯が焼け落ちた。その間、軍隊は消火を許さず、家財を搬出して避難する者を掠奪者と称して銃殺し、逆に自分達は掠奪をほしきままにした。特に兵士たちは古着屋や西洋雜貨店を狙い、風呂敷や毛布で包んで奪っていった。延焼家屋六百六十戸、死者四千五百余、傷者三千余、損害額は一千万元あるいは五千万元に及び、当分回復は不可能とみられた。⁽⁴³⁾

蔡和森は『嚮導』（一九二四年一〇月二七日）の「商團擊敗後広州政府的地位」なる論文でいう。中山先生が軍を率いて広州に戻り、反革命の紙老虎を五日完全に鎮圧した。吾人はここにおいて中山先生の英断を称賛するが、しかし広州政府がもっと早くこの断乎たる手段をとって商團を解散していたなら、その犠牲、損失は遙かにすくなかっただろうと思うと残念でならない。李福林や范石生、廖行超が突如豹変して商團を攻めたのは、革命に忠であったのではなく、勢力拡大と武器の増大、財貨の掠奪の為にすぎないと断罪した。しからは商團事件後の広州政府はいかなる政策をとるべきか、それに対して和森はいう、①無意味な北伐の中止、②工・農、小商人らに国民革命の新しい道を宣伝して理解させよ、③反革命的な客軍の解散と苛税の廃止、④軍閥と結ぶ帝国主義の罪惡を暴露し、粵海関の主権を回収せよと述べた。

おわりに

商團事件とは何か。その構成要件として、①まずアヘン戦争以来の列強の中国殖民地化の過程があった。香港には英国の強力な出先機関があり、経済的に広州を支配していた。②香港に隣接して、長い「革命」歴をもつ孫文の南方

政権があった。③結成されたばかりの、党员わずか数百名の中国共産党があり、④国民党も共産党も新生ソ連の物的・精神的な援助を受けていた。⑤広東のこの南方政府は軍閥（客軍）の軍事力によって支えられていた。⑥南方政府の財源は主として広州商人への恐るべき収奪によって成り立っていた。商人たちは商団（農村では郷団）を組織して自衛したが、それは都市の上層大商人から小商人、更に広州近郊の地主層を含む、形成期にあるブルジョワジーとして政府の重税政策に反対していた。

こういった複雑な状況の中で、国民党と共産党がソ連の指導下に矛盾を持ちつつも合作し、軍閥（客軍）の軍事力に依りつつ、英国と結ぶ（と国民党も共産党も確信していたがその証拠はないこと、本文中に述べた）商団を鎮圧した。これが事実過程である。

しからばこの商団事件の思想的意味は何か。それは時期尚早の、軍閥化し、かつ革命化した南方政権が、まさに抬頭しつつあるブルジョワジーを鎮圧したこと、つまり国民党・共産党・軍閥・ソ連という奇妙な同盟によるブルジョワジー打倒は南方政府のプチブルジョワ・デモクラート特有の急進性と理想主義性とのために、中国目前の窮状と危機を救うべく無原則的な同盟に走ったことである。いうなれば、南方政府としてそれくらいの理想主義と現実主義とをもち合わせていたのであり、国民党自体組織はピラミッド型の整然たる体系に組みかえられたいえ、それは依然孫文個人の党、孫文自身の個性（急進的プチブルデモクラット）の発露であった。それ故、孫文の没後は、その急進性、革命性は三民主義の原理ではなくて、その政策と解されるに至るのである。

商団の鎮圧によって南方政府は広州における支配権を確立するが、この複雑かつ奇妙な同盟はやがて崩壊していく。それは国民党から見れば清党の過程であり、共産党から見れば政府の右傾化（軍閥・帝国主義・ブルジョワジー

との妥協)を意味するであらう。ともあれそれはまだこの商団事件の段階では顕在化しないが、やがてはつきりと現われてくるはずである。なお本論稿では商団事件への黄埔軍校のかかわり方が他の一つの主題であったが、紙副と時間の関係で十分言及できなかった。稿を改めて書きつがれることになるう。

(完)

註

- (1) 橋樸『支那社会研究』日本評論社 昭和一五年(昭和一年初版) 二二六―七頁。
- (2) 羅家倫主編『国父年譜』(下) 中央文物供应社 一九五八年版 六八〇頁。民国十三年八月九日の条。以下本書を『国父年譜』とのみ記す。
- (3) 横山宏章「広東政權の財政逼迫と孫文政治―商団軍の反乱をめぐって―」(社会経済史学 四二―五)の註(1)を見よ。なおこの論文は大変優れた論文である。
- (4) 以下の統一馬路業權案については前掲横山論文、貴島克己「商団軍の發達」(北京滿鉄月報 第一年第四号 一九二四年七月)参照。
- (5) 陳廉伯についての断片的プロフィールは次を見よ。前掲貴島論文、根岸佑『中国社会に於ける指導層』平和書房 昭和二年 一八七―九〇頁、黄逸峰他『旧中国的買办階級』上海人民出版社 一九八二年 二六四―六六頁。また統一馬路業權案の経過については註(4)の二論文参照。
- (6) 九江での雲南軍驅逐、樂昌での朱培德への、從化での湘軍への驅逐運動については、前註(4)の貴島論文および中国国民党中央委员会党史委员会編訂『国父全集』第四冊 一一九八―一九九、一二〇二―〇四頁。
- (7) 大山「広州総罷市的解決与商団聯防」東方雜誌 第二十一卷第十二号 一九二四年九月一〇日。
- (8) 司馬長風『中国現代史』波文書局 一九七八年 八四頁。この書重要である。
- (9) 拙稿「黄埔軍校の設立過程とソ連」(中哲文学会報 第六号 一九七七年六月)参照。

(10) 駐防区域の画定については、『国父全集』第四冊の四六一頁、『吳鉄城先生回憶録』（緑装本）六五頁、『国父年譜』下、五八二頁など参照。

(11) 文公直『最近三十年中国軍事史』上、文星書店（初版一九三〇年）三二八—二九頁。

(12) 「建立革命基地的困難——孫中山与一九二三年的广州」『中国現代史論集 第七輯 護法与比伐』（張玉法主編 聯經出版事業公司 一九八二年 四五一—四六頁）所収。

(13) A.I. Cherepanov, *As Military Adviser in China*, Progress Publishers, Moscow, 1982, p. 112. 湘軍、予軍については前掲文公直『最近三十年中国軍事史』を見よ。

(14) 伍豪（周恩来）「最近二月广州政象之概観（十月三十日广州通信）」『嚮導週報 第九十二期』。

(15) 以下の軍閥については鈴江言一『中国革命の階級対立 1』平凡社 一九七五年（初版一九三〇年）五頁以下、波多野善大『中国近代軍閥の研究』河出書房新社 一九七三年、『中国現代史論集 第五輯 軍閥政治』張玉法主編 聯經出版事業公司 一九八〇年など参照。『国父全集』第四冊の一〇二二頁、雲南軍の短期手票強制使用例あり。

(16) 『廖仲愷集 増訂本』中華書局 一九八三年 二一六頁。また横山前掲（註(3)）論文も見よ。

(17) 佐々木到一『南方革命勢の実相と其の批判』大阪屋号書店 一九二七年 一三頁。

(18) 外務省『日本外交文書』大正一三年 第二冊 五二三頁。以下ではこの『文書』を多用するが、原文カナを平がなに改めて引用する。出所は一つ一つ明示しないが、同『文書』の「広東軍政府関係」の章の五二三頁以下に商団事件関係文書が集中する。

(19) 『国父全集』第二冊 七〇四頁。

(20) この間の事情については横山前掲論文、南雁「广州当局与商团」『東方雜誌 第二十一卷第十二号 一九二四年九月一〇日 参照』。

(21) 『国父全集』第三冊 九四八頁。

(22) 『日本外交文書』大正一三年 第二冊 五二七頁。

(23) 橋樑前掲書（註(1)参照）二八二頁。

(24) 以下の叙述については、南雁前掲文（註(20)）参照。

- (25) 『廖仲愷集』前掲書 二〇六—〇七頁。
- (26) 三条件などこの間の事情は『現代史料』第三集(波文書局 一九八〇年)所収の平子「記広州商団之変」及び范石生「読記広州商団之変後」、また南雁の前掲文(註(20))も見よ。
- (27) 公俠「帝國主義軍閥買弁右派共同宰割之下の広東革命政府(九月三日広州通信)」『嚮導週報 第八十二期』
- (28) 『国父年譜』下 六八五頁。
- (29) 蔡和森「商団事件の教訓」『嚮導週報 第八十二期』
- (30) 公俠前掲論文。
- (31) E・H・カー『両大戦間期における国際関係史』衛藤藩吉訳 清水弘文堂 一九八〇年 七六頁。
- (32) 『国父全集』第一冊 九〇四—〇五頁。
- (33) 『国父全集』第二冊 九〇〇—〇四頁。
- (34) 『国父年譜』六八七頁と『日本外交文書』五三一—二頁より合成。
- (35) 『国父全集』第三冊 九五—一頁。次の「最善」の「生路」は同九五—二頁。
- (36) 政府と商団とのこの交渉については、東方雜誌 第二十一卷第十二号の南雁の文、同誌 第二十一卷第二十号の大山「広州商団の大失敗」、北京滿鉄月報 第一年第六号の「孫文政府の広東省城焼打」を見よ。
- (37) 以下の孫文の四つの文は、引用順に、『国父全集』の第一冊の九〇七頁、第四冊の一二三九—四〇頁、第一冊の九〇八—一二頁、第一冊の九二—一四頁。
- (38) ソ連船ヴァラーフスキー号をめぐる以下の叙述については、王柏齡「黄埔軍校開創之回憶」(伝記文学 第十五卷 第六号以下、この回憶は『中国国民党第一次全國代表大会史料專輯』中華民国史料研究中心出版 一九八四年に再録されている)。チャレンバースの前掲書(註(3))、C.M. Wilbur and J. Lien-ying How, Documents on Communism, Nationalism, and Soviet Advisers in China 1918—1927, Octagon Books, N.Y., 1972。V.V. Vishnyakova-Akimova, Two Years in Revolutionary China, Harvard U.P., 1971, など見よ。なおソ連から届いた武器として、王柏齡は長槍とマシン銃しか挙げていないが、毛思誠『民国十五年以前之蔣介石先生』(香港龍門書店 一九六五年 三一〇頁)には山砲、野砲、長短槍枝、輕重機関槍の六種をあげている。その数量は不明。

(39) 大山の東方雜誌(二一—二〇)の一文(註(36))参照。なお「孫文政府の広東省焼打」(北京滿鉄月報第一年第六号)では、仏山の会議で決定したこととして陳炯明の広東招来なる項もあったという。また毛思誠前掲書の三一五頁も参照。

(40) この第四段階に関する文献は多い。嚮導や註(38)(39)にあげたものなど。

(41) 『國父全集』第三冊 九六六頁。商団事件の間、孫文は広州に戻らなかったと思われるが、チェレバーノフ前掲書九八頁では商団戦で孫文が陣頭指揮したことになっている。また Dan N. Jacobs, Borodin-Stalin's Man in China, Harvard U.P., 1981, p. 162 では一九二四年一〇月一三日に韶関から広州に戻ったとある。しかしこれは私の論述が示すように孫は韶関にあって北伐にはやっているのであって広州に戻ってはいない。

(42) 以下の記述は Wilbur and How の前掲書(註(38))一七一—七三頁をみよ。政府側が一四日までにとった六つの措置も同じところ。

(43) これは商団側からみた孫文政府の暴虐の数々である。「支那研究」第一卷第一号(一九二四年一二月)所収の「孫文と中産階級」をみよ。チェレバーノフ前掲書九八頁ではこの市街戦で死者は多くても四百五十人ほどとみているが、すくなくさるよう思われる。